

【資料紹介】

泊園書院藤澤東畷と豊岡藩主京極高厚 ―館蔵資料「尊道巻」の紹介を兼ねて―

藪田 貫

はしがき―「武士の町」大坂―

平成二十六年（二〇一四）四月、兵庫県立歴史博物館（以下、歴博と略称）第四代館長に就任して思いがけずも一年が経とうとしている。「二〇一年昔」を超えている。その歳月は、これまで自分が続けていた歴史研究とは別に、博物館という現場で歴史を学ぶ日々でもあった。その恩恵を、まとめた形で書き記す余裕はまだない。だがその歳月の間、考え続けたことがある。それは週に二日、大阪から姫路に移動することから来る距離感である。

かつて「新修神戸市史」の編纂に従事したことで阪神間の距離感は、西の端の西区（旧国で言えば播磨の一部）も含めて理解していた。しかしそれは訳が違う、いや桁が違うのである。言い換えれば、明石から姫路までの距離が分かっていなかったのである。それはとりもなおさず播磨が、いかに大きいかを物語る。これまで大阪に暮らし、大阪で学び、大阪で考えてきた身では捉えられない「何か」がある。それを一言で言えば、「播磨」という国は、わたしにとって「異世界」であった。

その認識は、博物館友の会の方々と出会い、交流する中で深まり、いまでも深化し続けている。この後、「第二の故郷」になるかもしれないと思えるほどの豊かな経験を与えられていると実感するが、それは所詮、わたし個人の人生での話。その距離感を、異世界観を、歴史研究者なら「学問的に考えてみよ」と、もう一人のわたしが問いかける。

館長として過ごした一年は、自問自答を繰り返した歳月ともいえるが、歴史研究者としての「根」が大坂にあったため、そこで考えてきたことを踏まえ、どう播磨に飛躍するか、が問題であったが、意外にもそのカギは、「武士の町」大坂というわたし自身の問いかけにあった。

館長就任以前の平成二十二年（二〇一〇）に、小著『武士の町―天下の台所』の侍たち―』（中公新書、二〇二〇年講談社学術文庫として復刊）を発表しているが、そこでの問いを発展させることで手掛かりを得た。具体的には同一四年、有志で始めた「大坂諸藩研究会」を通じてその問いかけが、広がることとなったのである。

大坂周辺には尼崎や明石・岸和田の大藩を除くと、知行高二万石前後の小さな藩が多いことに注目し、それと大坂城との関係を調べてみようとするアイデアであったので、「小藩研究会」とも称されたが、その積み重ねを通して、

平成二十六年（二〇一四）度の科学研究費補助金を得ることができた。研究代表者は京都大学人文科学研究教授岩城卓二氏であった（岩城科研と略称）が、幸いにも、そのメンバーに入れてもらうことで四年間、継続して調査・研究に取り組むことができた。^(注1)

いま思い返してみてもその開始が、館長就任時に重なっていたのは願ってもない僥倖というほかない。館長として、「ひょうご五国」現在の兵庫県域が、主に摂津・播磨・丹波・但馬・淡路の旧五国（一部を含む）からなることを踏まえて唱えられている行政用語の実情を知るといふ課題と、近世史研究者としての課題が、共存することになったからである。

そこでほぼ時を同じくして始まったのが、「播磨」の宍粟山崎藩本多家と「但馬」の豊岡藩京極家の調査であった。

宍粟山崎藩本多家には、先学に導かれて宍粟市の公益財団法人山崎本多記念館を訪れ、大名本多家の記録、とくに藩主の動静を詳しく記した「御用部屋日記」が、江戸・国許、大坂と揃っているという稀有な状況に出会い、魅入られた。^(注2)

その結果、手掛かりが生まれた。大坂と播磨・但馬を繋ぐ手掛かりが、見つけたのである。公儀の城・大坂城に、城代や定番・加番という形で大坂勤めをする諸大名は、譜代大名を中心に諸国に散在しているが、譜代大名山崎本多家は、その常連であった。そこで江戸・国許の「御用部屋日記」に接続する形で、在坂期の日記が残されていたのである。貴重な史料であったので、「宍粟山崎藩天保六年大坂在番日誌」として本誌に連載し、それをうけて著したのが小論「大坂加番と藩政」である。^(注3)

幸いにも同じ発想は、豊岡市教育委員会の援助を受けて始まった同じ兵庫県域の小大名、但馬豊岡藩京極家でも通用することができた。『豊岡市史』編纂を通じて、大名京極家と家老職を代々勤めた舟木家にそれぞれ、相当の

文書群があることが分かっていたが、現地に残る舟木家文書に狙いを定めた。大坂と豊岡の距離感も、姫路に負けず大きかったが、四季を通じての調査は、但馬の風土を垣間見させてくれ、印象深いものがあつた。とくに平成二十六年二月半ば、駅前ホテルに泊まった翌朝、窓越しに市街地一面の真っ白な積雪を見た瞬間は忘れがたい。^(注4)

ただし調査を通じて、浮かび上がる史料と史実は、宍粟山崎本多家と但馬豊岡京極家とは相当、趣を異にした。宍粟山崎本多家では「御用部屋日記」を通して藩主の動向が詳細に分かるのに対し、豊岡藩の場合は、若き藩主が「学文好き」であったために、勤番中の大坂でみずから出前講義を受けていたのである。このトピックに喜んだわたしは、早速、執筆中の小著『武士の町大坂』に取り込んだ。

こうして加番・大番というチャンスは、「政事」であると同時に「文事」を保証するものであった。嘉永四く五年（一八五く五二）に加番を勤めた但馬豊岡藩京極家では在坂中、大坂淡路町に泊園書院を開いていた藤沢東暎を城内に呼び寄せ、藩主・藩士ともども講義を聞いている。さらにその招聘にもかかわらず家老の猪子清は、直後、藩主の許しを得て、入塾している。当時二〇歳の猪子であるが、七年後には、同藩の学校奉行兼藩校取締となっている。

勢い余って、地元豊岡の名士、猪子清に及んでいるが、情報源は『豊岡市史』にある。同書下巻（一九八七）「出身人物列伝」にはこう記す（以下、傍線は筆者による）。

天保四年（一八三三）豊岡藩重臣猪子正方の二男（長男は早世）に生

まれた。幼名謙三郎、長じて左家太、後に清・一新、さらに改めて一清と名乗った。大坂の儒学者藤沢東暎に学んだ。慶応四年（一八六八）四月御側年寄役に、翌明治二年十一月三八歳のとき豊岡藩大参事（版籍奉還以前の筆頭家老に当たる）に進んだ。四年七月には藩は県と改称され、その豊岡県が十一月に廃県となると翌五年には上京し大政官に出仕、十八年に「法制局七等出仕」を辞して京都在住の長男止戈之助宅に隠居した。二十七年四月没、六二歳であった。

簡潔な文章の中に、「大坂の儒学者藤沢東暎に学んだ」とあるが、その詳細は不明である。豊岡市サイドとしては、それで十分であろうが、舟木家文書の調査は、その経緯を明らかにする可能性を秘めている。

そこに朗報が届く。なんと足下の歴博に、『尊道巻』と題する巻物で、もともと泊園書院藤澤家所蔵の資料が収蔵されていることが明らかとなったのである。そればかりか、藤沢東暎が豊岡藩家中の猪子清に宛てた書簡が、歴博とともに兵庫県公館県政資料館歴史資料部門にも所蔵されていることを知ることとなった。^(注5) 兵庫県史編纂にかかわる収集資料であるが、それらがわたしの前に届けられたのである。

この泊園書院とは、関大教員であった時代に深くかかわっている。なぜなら関西大学が、泊園書院をルーツの一つとすることから、記念会が組織されており、わたし自身その会長を平成二十年（二〇〇八）以降、退職まで勤め、泊園書院と藤沢東暎に大きな関心を抱いていたからである。^(注6) それは大坂を「武士の町」と並んで「学問の町」として見ることを生み出し、『武士の町大坂』に言う「政事と文事」に結実した。しかしながら忽々の内に記したもので、当然、熟考された結果とは言い難い。とくに『尊道巻』が貴重な館蔵資料であることを考えると、いずれ適当な時宜を得て紹介したいと考えていた

が、この度、その機会を得ることができたので、ここにあらためて取り上げようとするものである。

一 泊園書院と「尊道巻」

さて泊園書院は、創始者である藤沢東暎（一七九四～一八六四）以下、南岳・黄鵠・黄坡の三世四代にわたり、およそ一三〇年の間、大阪の地で営まれた私塾、漢学塾である。東暎その人は、関西・大阪二世紀協会の編著『なにわ大坂をつくった一〇〇人―一八世紀―一九世紀編―』（二〇一九）に木村兼葭堂や大塩平八郎らと並んで紹介されている。

『尊道巻』と題する巻子はその書院の記念品、とくに初代院主藤沢東暎の輝かしい功績を伝えるものとして、書院の手で作成された逸品である。そんな貴重な文化財がいつ塾外に流出したのかについては不明であるが、写真に見るように桐箱に収められている（写真1）。広げてみると次々と文書が顔を出し、「尊道巻」という名前から得られるイメージとの齟齬が甚だしい。



写真1

むしろ実際は、一三点の文書を張り合わせたものに「尊道巻」というタイトルが付けられたと理解する方が素直であろう。

その成り立ちについては、『第二十二回泊園同窓会誌』(一九一一、泊園文庫自筆稿本、関西大学図書館蔵)に、次のようなコメントが載る。^(注7)

「我東咳先生が凡そ一年有余、城内にて毎月兩度魯論を講じられた際、公より受けられたる款待の記念巻なり」

一方、明治四十四年(一九一一)の時点で二代院主南岳は、「当時京極公より賜たる品目と、名代よりしての消息とを一巻に装し、尊道巻と題せられた」と箱書きし、その成り立ちについて解説している。具体的にいえば、前半六点が「京極公より賜たる品目」であり、後半七点が「名代よりしての消息」となる。文中の京極公とは、播磨国豊岡を居城とした一万五千石の大名豊岡藩主京極高厚を指す。

本稿の目的のひとつは、「尊道巻」の全容を紹介することにある。後に詳しく見るように、収められた手紙には差出された月日が書かれているが、豊岡藩主京極高厚が大坂城加番として城内中小屋に居たのは、嘉永四(一八五二)年八月から翌年七月末までである。加番とは、大坂城内を警固する職務で、二万〜三万石の諸大名が幕府の命で務めた軍役で、主力である大坂城代、京橋・玉造両定番を補助する意味から「加番」とされた。城内にある四つの加番小屋、すなわち山里・青屋口・中小屋・鴈木坂の四ヶ所に家臣を率いて駐留し、大阪城を守護するのが務めであった(詳しくは『武士の町大坂』参照)。八月初めに入城し、翌年七月末に交替するという一年任期であったので、「凡そ一年有余」というのは正確を欠く。

このように「尊道巻」の中身が判明してみると、なぜ、「(京極)公より受

けられたる款待の記念巻」に、「尊道巻」という題名が付けられたのか気になる。私見を述べれば、おそらくそこには、文政八年(一八二五)、大坂淡路町に開塾した泊園藤沢東咳が、町人や諸藩の武士の門人でなく、正真正銘藩主である大名に招かれて進講した記念の意味があったと思われる。

私塾はどれだけ門人を集めようと、所詮、私塾である。しかし大名に進講したとなれば、話が違ってくる。実際大坂には、懷徳堂という幕府公認の漢学塾があり、武家との結びつきはまことに濃密であった(梅溪昇『大阪府の教育史』一九九八、思文閣出版は、懷徳堂の官学化と表現している)。中井竹山らその学主たちは代々、大坂に勤務する幕府役人、大坂城代や加番、大坂町奉行・代官などに「論語」や「貞觀政要」などを講釈するのが慣わしであった。それはについては、当の塾主からも、講義を受ける武家・大名の側からも複数の証言が残されている。

なかんずく大名との関わりを遺憾なく示すのは昌平黌で学んだ篠崎小竹(名は弼)で、漢詩集『今世名家文鈔』巻二には、「送朽木公序」「送節山板倉公序」が収められている。

前者は「福知山朽木侯之来副鎮坂城也、其師佐藤一斎先生使廷弼伴讀焉」とあるように、丹波福知山藩主朽木綱張が天保十三(一八四二)年八月から十四年七月まで「副鎮坂城」。つまり大坂城山里加番を勤めた折に、城内で進講したことを機縁に詠まれたものである。この進講、小竹の師である儒学者佐藤一斎の勧めがあったことによる。

一方、「送節山板倉公序」は天保十一年八月の年期をもつが、前年八月から山里加番であった上野安中藩主板倉勝明が勤務を終え、帰国するに際して詠まれた詩である。「安中板倉侯、敏而好学、其来副鎮坂也、時召弼侍讀經史」とあるように、文事に通じた彼もまた、小竹から講義を受けていた(板倉をはじめ文事に通じた大名については、福井久蔵の名著『諸大名の学術と文藝

の研究』一九三七、厚生閣が、その概要を教え、今なお有益である)。

それだけではない。洗心洞主人大塩平八郎も、加番勤務の大名と接点があった。『洗心洞詩文』に収められた詩「南至日陪鳥山候代人作」に言う下野烏山藩主大久保氏の場合、藩主忠成は文化四(一八〇七)、同八、同十二、文政三(一八二〇)年と四度も務め、天保二年(一八三一)には次期藩主忠保と代わっている。さらに天保三年八月には、丹後田辺藩牧野節成が中小屋加番として着坂するが、翌年六月付で大塩が家老で儒学者の牛窪謙下に送った手紙が残されている(相蘇一弘『大塩平八郎書簡の研究』二二)。話題は、主著『洗心洞笈記』を贈ることからと、出会う日取りを通知するもので、文中、文章家として知られた儒学学者野田笛浦(一七九九〜一八五九)の名が見える。ついでながら大塩が初めて大名家に招かれて講義したのは、近江大溝藩主分部光貞であるが、藤樹書院にほど近いことから、書院での講義の後、藩邸に招かれることで実現している。この分部公、六年八月から一年、青屋口加番として大坂勤めを果たすが、その先例は寛政六年(一七九四)、先代光実が中小屋加番を勤めたことにある。

こうした実例を検討すると、大坂城の加番制度は、特定の大名家と私塾の儒者が大坂で出会う機会を保証しており、参勤した江戸で昌平齋出身の学者らと出会う機会と並立するものであったと考えられる。

その機会を、後発の儒学者が真似ないわけではない。弘化三年(一八四六)十月、江戸から大坂に帰った広瀬旭荘も、早速、五日に大手町の札場に使いを送り、城内に入っている。その後、「午後入城講于公所如例、黄昏帰」と定期的に入城の記事が出るが、その行き先は豊後府内藩主松平近説のいる青屋口加番小屋である(「日間瑣事備忘」『広瀬旭荘全集』日記編、一九八二)。「府内侯学業躋、皆謂先生之啓沃之力也」と評されるように、旭荘の学識もまた際立っていた。

そこに東咳を置いてみる時、一刻も早く、学者としての才能が、幕府や大名家に認められることを望んだとして何ら不思議ではない。その絶好の機会が、開塾して二六年目に、豊岡藩主京極高厚との出会いによって生まれたのである。招聘状などを記念として取っておきたいと思うのも、けだし当然であろう。

その意味で嘉永四(一八五二)〜五年は、泊園書院の歴史にとって画期的な年であった。その画期性はのちに詳しく検討するが、藩主京極高厚との出会いは、泊園書院にもう一つの意味を与えた。それは藩主が加番勤務を終え、国許に帰るに際し、家臣猪子左家太(清)を残し、泊園書院に入門させていることである。はたして「泊園書生姓名録」には彼の名が、「八月七日入塾」として記されている(『泊園書院歴史資料集』二〇一〇)。「尊道巻」に収められた手紙の中に、猪子左家太の東咳宛書簡があるように、当時彼は、藩主高厚に随い大坂城内に詰めていた。さらに藩主が大坂を離れたのちも、そのまま大坂に残り、泊園書院の寄宿生となったのである。こうして藩主京極高厚との出会いは、私塾泊園書院の地位を高めるとともに、大名の家臣を高弟として獲得するという機会にもなった。

二 泊園書院と藤沢東咳

さて文政八年(一八二五)に開塾された泊園書院には、天保十四年(一八四三)から安政六年(一八五九)にかけての年度別入塾者が、東咳の筆になる「泊園書生姓名録」によってわかる。通学生を含まず、寄宿生のみの数値と思われるが、連年一〇名から二〇名程度の入塾があり、一七年間の総数は二八八名である。また出身地別にみるなら、出身地讃岐が四七名と多く、ついで大坂二一、紀伊二〇、摂津一八と続く。距離的には遠い肥前出身

者が一人名いるが、蔵屋敷の存在を考えたとき、あながち想定できない数値ではない。

これだけの門人が、東咳（一七九四〜一八六四）の下にどのようなように集まるに至ったかは検討するに値する。なぜなら近世後期の大坂には、学問所が林立していたからである。

いうまでもなく享保年間に開塾された懐徳堂が船場、尼崎町にある。天満では、町奉行所与力大塩平八郎（一七九三〜一八三七）が洗心洞を創設し、文政八年頃には「体裁ほぼ整い、塾生一七、八人」であった（宮城公子『大塩平八郎』朝日新聞社、一九七七）。また篠崎小竹（一七八一〜一八五二）が主宰する梅花社は、文化十一年（一八一四）から嘉永元年（一八四八）にいたる三五年間に、総計一四八八名の門下生を数えるなど隆盛を誇っていた。総数の多さもさることながら、出身地も関西圏はもちろん、東は奥州、西は九州にいたる広い範囲で門人を集めているのが注目される。おそらく大坂では、最大の私塾であったと思われる。もうひとつ廣瀬旭荘（一八〇七〜一八六三）が在坂中に開いた塾には、天保七年〜弘化四年の間に、のべ二五六名が入門している。大阪市中が六五名と多いのが特長である（『大阪府の教育史』）。

こうした漢学・漢詩中心の私塾が競い合う環境のなか、泊園書院も出発している。東咳に遅れること一〇余年、天保七年（一八三六）、豊後日田から来坂した旭荘は、塾を開くにあたって「諸生を教候ニ八京阪ハ六ツ敷候、名を揚候は至て易候」と兄淡荘に伝えたという。個人として名を挙げるのは容易だが、門人を集めるのは困難だ、という意味だが、それは東咳も味わったことであろう。開塾後、門人帳が記されはじめるまでに八年を要しているのは、その辺の事情を物語っている。一方、旭荘はまた「儒者仲間は何れも和熟、党と申者無之」と述べ、「小竹を筆頭にいわばもちつもたれつの学者文人仲間」

の様相を伝えている（『大阪府の教育史』）。

年不詳十二月十日付、宮地佐仲宛書簡で篠崎小竹は、「諸字学風之儀被仰下候、委敷者不存候得とも、東咳ハ讃州中山城山と申、徂徠学人之門下二候間、護園流より近来ハ博く被致候」と述べ、つづけて「廣瀬者木子ニて博く書を被読、記憶も宜敷候人、経説ハ一家を成候積と被存候」と書いている（関西大学図書館所蔵）。学者文人仲間の筆頭である小竹が、徂徠学者として東咳が一目置かれる状況にあったことを述べており興味深い。

藤沢東咳が儒家として『新撰浪華名流記』に紹介されたのは、弘化二年（一八四五）のことである（住居は瓦町）。おそらくこれが、大坂の人名録への最初の登場であろう。三年後の嘉永元年（一八五二）刊行『浪花当時人名録』には淡路町堺筋として出るが、序列は、篠崎小竹・並河又一郎・中井脩二・後藤松蔭・斎藤鑿江に次ぐ六番手で、東咳の後に旭荘が来る。この当時、東咳も旭荘も、大坂文人グループの新参者というのが適当であろう。

旭荘の日記『日間瑣事備忘』をめぐり東咳の登場を拾うと、弘化四年正月二日に初めて見える（旭荘は弘化三年十月一日、大坂に帰住）。

卯上刻牌携稼一郎出賀葛岡仲英・藤澤東咳主人供屠蘇使其子恒太郎見年甫六歳

早朝、年賀の挨拶廻りに出かけた旭荘は瓦町の泊園書院を訪れ、東咳と当時六歳の嫡子恒太郎（のちの南岳）に会っている。その後、篠崎小竹・中西耕石・後藤春草（松蔭）・篠崎訥堂（竹蔭）ら文人仲間宅を廻る。この記事は皮切りに東咳の名は『日間瑣事備忘』の中にしばしば見え、年始と中元の時期にほぼ毎年、登場する。両者の付き合いが恒常化している現れであるが、なかには「東咳使人来借蒙古源流」（弘化四年九月二十日）、「東咳門人紀人某来見乞字」（嘉永元年四月十七日）、「訪東咳主人供酒戌下牌帰」のような記事が見え、親密の度を加えている。

その後、再度、大坂の人物譜に東咳が出るのは、安政三年（一八五六）刊行の『浪華名流記』で、落合雙石に次いで二番手に登場する。懷徳堂の並河寒泉（一七九六〜一八七九）や篠崎小竹の後継者と目された後藤松蔭（一七九七〜一八六四）に先んじている。

儒学 藤沢東咳 名甫字元翁号泊園称昌蔵、以寛政甲寅生讚岐高松府人、寓瓦坊第二街、少受業於本府中山城山、其学出自護園後受本藩俸

五年の間に地位を一気に上げたわけだが、その間に、嘉永四年の豊岡藩主京極高厚への進講があった。この頃、すでに六〇歳を超え、大坂での地位が頂点を極めようとしていたのである。

一方、高まる東咳の名声が、出身地高松藩に伝わらないはずはない。なにしろ門人の中で最も多かったのは、讚岐出身者であった。幸い、高松藩家老で文人としても知られた木村黙老（一七七四〜一八五六）の随筆「統聞まゝの記」（神宮文庫蔵）に、東咳に関する記述がまとまって見られる。^{〔註〕}

嘉永二年西集の〔五十〕には、まず片山達稿「東征日課」がある。前年八月、許しを得て昌平齋から大坂に向かった片山は、二十八日船で天保山に着き、翌日「訪篠崎小竹藤沢東咳二老」。さらに「会郷人富家生寓在藤澤氏塾、遂俱過四天王寺、抵平野郷含翠堂」と、小竹と東咳を相次いで訪問する。その上で、当時、東咳が出向していた大坂の東郊平野にある私塾含翠堂に同道する。そこで痛飲、翌九月朔日、泊園書院に戻るが、その後、藩邸に至り、三十石船で夜中、伏見に向かった。

〔五十二〕には、「嘉永四辛亥大坂なる儒者藤澤甫東咳之詩」が筆録されている。

嘉永辛亥、豊岡候之副領于浪華城也、聘幣召甫使講論語于廨舎、恩禮殊渥、且喜且懼而賦

誰將姓字達高闈 召命慙々不敢違 敝履出門還自訝 安車到巷本依稀
升筵講說愧師徳 捧盞獻酬忘爵威 為是使君尊道義 珠經頓覺發光輝

読み下すだけの能力が筆者にはないが、この詩の中に「尊道」の語句がある。「京極公より賜たる品目と、名代よりしての消息とを一巻」に装丁したものが、東咳によって「尊道巻」と名付けられたことを示唆する。

この七言律詩は、『東咳先生詩存』に収められている（十二葉裏）ほか、『東咳先生文集』巻三に「送奉豊岡侯序」と題する一文がある（『泊園書院歴史資料集』）。

嘉永四年十月下旬、家老舟木氏を介して出講を求められた経緯から始め、「講一月二次」、つまりひと月に二度の予定で出講した（陪聴する者が三十人ほど）が、論語二十篇の講釈が在任期限の八月末までに終わらないと分かる回数を増やし、七月中に完了したので、高厚公も喜んだ、と記している。文中、「市中一書生、豈敢貪公侯之恩以為榮哉。雖然公之遇書生、尊道義也」とあり、藩主高厚公が市中の一書生を厚遇したことを「道義を尊ぶ」と讃えている。それが「尊道巻」の由来である。

木村黙老（一七七四〜一八五六）の随筆「統聞まゝの記」は、ここで終わらない。〔六十〕追加の式には、「藤沢東咳大坂御入次第一」として、「大坂来翰写十一月二十六日到来」を載せる。全文は、以下の通り（読点を入れたが、欠字は原文通り）。

追 啓

帯刀人儒者 藤沢東咳

右者、此元御加番京極飛驒守殿此度入門被致度旨、前以家老舟木老之助使者ヲ以內意被申入、其後表向飛驒守殿為名代、右同人行列等取繕東咳方江罷越、今般入門被致候旨被申入、鮮鯛一折樽代五百疋直名目錄ヲ以被相贈、去ル八日初而 御城入仕候ニ付迎使者被指
向、駕篋并若党式人草履取為迎罷越 御城入仕候所、殊之外手重
之御取扱ニ而对面被致、於居間盃事有之、論語講釈相初、万々首尾
能相濟、外間実義共冥加至極難有旨申出候、尤阿之方指引人取扱向
手續書申受罷り帰候由ニ而指出候間、写忝通掛御目申候、阿之方指
図ニ而飛驒守殿对座仕、始終帶劍ニ而罷有、講釈之席ハ上座江相進
盃之節ハ飛驒守殿席ヲ被出浮候由并已後者一ヶ月壹度ツツ 御城
入仕候筈ニ御座候由、且飛驒守殿二者当年十九歳被相成候得共、殊
之外文学之志、別而古学被相好候様子、東咳物語ニ者御座候、此段
全為御心得得貴意候、以上

十一月十八日

香西茂十郎

一読して明らかなどおり、前述した豊岡藩主京極公に対する大坂城内屋敷での進講を伝える手紙であるが、ここには公の東咳への「入門」とある。また高厚公が、当年とって弱冠、一九歳の青年藩主で文学、ことに「古学を好む」人物と記され、東咳招聘の背景が垣間みえる。手紙にはさらに「藤澤東咳御手続書」(「尊道卷」の史料⑦)が添付されている。

差出人の香西茂十郎は、おそらく高松藩蔵屋敷の留守居と思われるが、まだ確証を得ていない(蔵屋敷は玉江橋のたもと、現在リーガロイヤルホテルの立つ場所にあった)。「帯刀人」とは、帯刀を許された武士や牢人を指すが、大坂市中に住むことが認められるには、東西の町奉行所に届けることが義務

付けられていた。その意味で東咳は、市中の瓦町(のち淡路町)に住みながら、名字帯刀を認められた身分であった。名字帯刀を認めたのは当然、出身地高松の藩主松平頼胤である。したがって彼の東咳での動静は逐一、高松藩に把握されていたといえる。

京極高厚への進講の翌年、嘉永五年八月に東咳は高松藩の士分(中士)に列せられているが、それによって東咳は、帯刀人から高松藩家来に変わった。文久三年(一八六三)五月、東咳はさらに、廣瀬旭莊・後藤松蔭・並河寒泉・中井桐園らとともに御城入り儒者の一人として選ばれた。大坂の儒者としては最高のランクである。それを伝える書状には次のようにある(『泊園』第一九号、一九三六)。

別 啓

五月二十五日西御番所より高松御留守居へケ様之書付来り候

松平讚岐守家来 藤澤昌蔵

右昌蔵義、御城入儒者ニ可申付旨、御城代松平伊豆守殿より被相達候間、

其趣可被申上候、

突然の大坂町奉行所からの指示に対し、蔵屋敷留守居では至急、本藩へ連絡を取り、藩主の意向を確かめた上で、六月、次のように回答した。

拙者家来藤澤昌蔵義御城入儒者可被仰付旨、在坂之家来共より申越承知致候、於拙者大慶存候、右為御請以使者申達候

東咳は、七月六日大坂城内に入り、大坂城代松平信古に進講し、後藤松蔭ら三名とともに御城入り儒者となった(旭莊は辞退した)。その直後、東咳

は尼崎藩にも進講を求められる。大坂城内での「御入門式」のち七月二十日、嫡子恒太郎を同伴、尼崎城本丸に登城、藩主松平忠栄と「子弟之御杯」を交わし、翌日帰阪している。

後年のことであるが、二代院主南岳は大正二年（一九一三）春、東咳の没後五〇年を記念して『菁莪録』（泊園文庫蔵）を編んだ。東咳門人五〇人を載せたものだが、別扱いで「束脩を行い、弟子の禮を執った」大名として豊岡藩主京極高厚と尼崎藩主松平忠栄の二名を上げている。

こうして初代院主藤沢東咳の豊岡藩主京極高厚への出講は、泊園書院の歴史の一大トピックと位置付けられ、「尊道義」と題する書軸が生まれたのである。

三 「尊道義」の紹介

さてつぎに、「尊道義」とされた卷子を紹介する。各文書については便宜的に、表題（仮題）を付け、巻頭から巻末に順番を施した。写真2・3で見られるように、前半の目録は大判一段であるが、後半の書状は切紙二段で貼り付けられている。翻刻に当っては、原状を尊重し前半は一段組みとし、後半は二段組で紹介する。なお、史料は読み下し、適宜、読点を施した。旧字・異体字ならびに改行は原文に従い、末尾に若干の補注を施した。



写真2 (©目録)

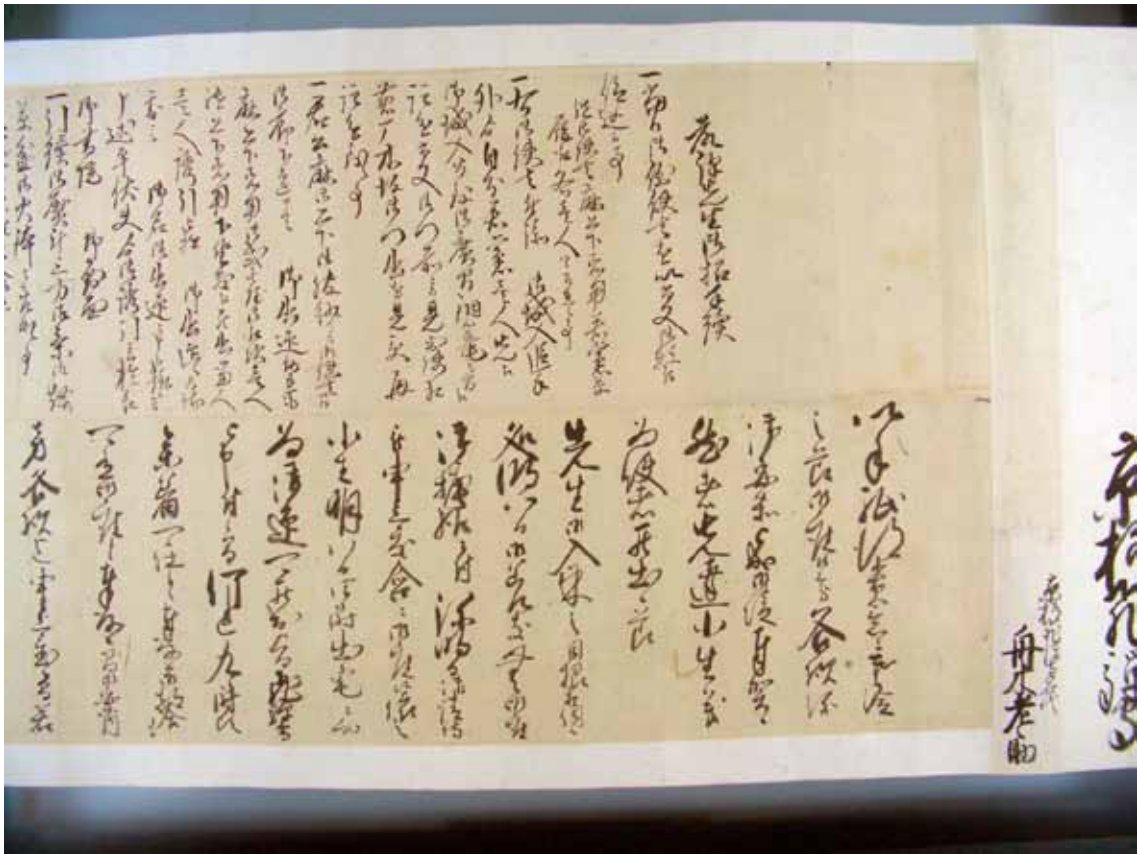


写真3 (7)⑧書状

① 「目録」	鮮鯛 一折	御樽代 五百疋	以上	京極飛騨守	京極飛騨守名代	舟木老之助
② 「目録」	白砂糖 一箱	京極飛騨守				
③ 「目録」	御肴 一折	御扇子 一箱	以上	京極飛騨守		

④ 「目録」

御太刀 一腰
御馬 一疋
以上

京極飛驒守

京極飛驒守名代

舟木老之助

⑤ 「目録」

御肴 一折
御樽代 三百疋
已上

京極飛驒守

京極飛驒守使者

谷口藤太夫

⑥ 「目録」

越後晒 一反
御樽 一荷
御肴 一折

御扇子 一箱

以上

京極飛驒守

京極飛驒守名代

舟木老之助

(上段)

⑦ 「藤澤先生御招手續」

藤澤先生御招手續

一 当日御側使者を以、尚又御頼被仰込候事

但御使者麻上下着用、若党草

履取各忝人ツ、召連候事

一 右御使者付添 御城入追手

外より自分若黨忝人先江

御城入為致、御廣間銅箆之間江

註進、尚又御門前二而見歩使相

兼雁木坂御門出を見受、再

註進致候事

一 君公麻御上下御服紗二而御使者間

御廊下邊まで 御出迎、何れも

麻上下着用、御式臺御取次忝人

(下段)

⑧ 「京極飛驒守内田村多門書状」

以手紙得貴意候、寒冷

之節御座候處、各様弥

御安泰被成御凌奉賀候

然者、先達小生義

為使者罷出候節

先生御入来之日根(限)相伺候

処、明八日御差支無御座

御模様二付、弥明日御請待

被申上度含二御座候、依之

小生明八日四ツ時出宅二而

為御迎可罷出旨、飛驒守

被申付候間、何れ九ツ時頃

参着可仕と奉存候、御都合も

可有御座と奉存候間、御案内

<p>一 御居間江被罷出、引續 何れも始諸士一同御次江伺公、御講釋相始候事 惣而前後差引御側役取扱之事 但 御側役麻上下着用御給人 以上御取次繼上下着用之事 一 御講釋相濟、於 御居間御盃 事被遊候事 御献立左之通 御吸物</p>	<p>一 引續、御熨斗三方御茶御煙 草盆御火鉢被差出候事 但惣而御小姓御給仕之事 右相濟一旦 御退坐 一 何れも罷出挨拶申述、暫時 休息 一 御居間御都合出来次第 君公御出坐、御用人誘引二而 先生 御居間江被罷出、引續 何れも始諸士一同御次江伺公、御講釋相始候事</p>	<p>一 引續、御熨斗三方御茶御煙 草盆御火鉢被差出候事 但惣而御小姓御給仕之事 右相濟一旦 御退坐 一 何れも罷出挨拶申述、暫時 休息 一 御居間御都合出来次第 君公御出坐、御用人誘引二而 先生 御居間江被罷出、引續 何れも始諸士一同御次江伺公、御講釋相始候事</p>	<p>繼上下着用、下坐敷江罷出、留人 老入誘引被遊 御出迎候御場 處二而 御名御出迎被申候趣候旨 申述平伏、夫より御誘引二而於表 御書院 御對面</p>
<p>⑨ 「京極飛騨守内舟木老之助書状」 以手紙啓上仕候、酷寒</p>	<p>十一月七日 (嘉永四年) 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上 旁各様迄申上置候間、若 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上</p>	<p>十一月七日 (嘉永四年) 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上 旁各様迄申上置候間、若 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上</p>	<p>十一月七日 (嘉永四年) 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上 旁各様迄申上置候間、若 又御差支等も御座候ハ、 被仰知可被下候、右御問合 可得貴意如斯御座(候)、以上</p>
<p>御盃打 御銚子 御小皿肴 御銚子 御肴 御銚子 御土器 御三方 御取肴 巻鰯 御銚子 御盃事相濟、於別席御支度 被差出候間、寛々御用御坐候様二と 御挨拶、退引之節御用人誘引 於 御書院、左之御料理被差出候 但御給仕御徒士二而相勤候事 御平皿 御汁 御香物 御飯 御焼物 御硯蓋 御差身</p>	<p>此處二而宜御用御坐候様御挨拶 被遊、様子御見計御別盃之 御沙汰有之、次第左之通 御土器 御三方 御取肴 巻鰯 御銚子 御盃事相濟、於別席御支度 被差出候間、寛々御用御坐候様二と 御挨拶、退引之節御用人誘引 於 御書院、左之御料理被差出候 但御給仕御徒士二而相勤候事 御平皿 御汁 御香物 御飯 御焼物 御硯蓋 御差身</p>	<p>此處二而宜御用御坐候様御挨拶 被遊、様子御見計御別盃之 御沙汰有之、次第左之通 御土器 御三方 御取肴 巻鰯 御銚子 御盃事相濟、於別席御支度 被差出候間、寛々御用御坐候様二と 御挨拶、退引之節御用人誘引 於 御書院、左之御料理被差出候 但御給仕御徒士二而相勤候事 御平皿 御汁 御香物 御飯 御焼物 御硯蓋 御差身</p>	<p>此處二而宜御用御坐候様御挨拶 被遊、様子御見計御別盃之 御沙汰有之、次第左之通 御土器 御三方 御取肴 巻鰯 御銚子 御盃事相濟、於別席御支度 被差出候間、寛々御用御坐候様二と 御挨拶、退引之節御用人誘引 於 御書院、左之御料理被差出候 但御給仕御徒士二而相勤候事 御平皿 御汁 御香物 御飯 御焼物 御硯蓋 御差身</p>
<p>御座候得共益御安泰可被成 御座奉南山候、然者先日ハ 為名代参堂仕候處、段々 御腆念之御取扱被成降 忝仕合奉存候、早速御禮 可申上候處、彼是取紛罷在 其義無御座、恐縮之至奉存候 此段、御仁恕可被成下候 一過日者、右為御挨拶札場迄 御来駕、其上被為入御念候 御書表之趣、則寡君江 申聞候處、毎々御丁寧之 御取扱却而被致迷惑候 事二御座候、尚宜申上候様申付候 乍略義、此段申上候 一先日参堂之節、申上候 但馬天民方江大銃為 御一見被成御出候義、来ル十六日 昼比より御差支も無御座候者 御供仕度奉存候、萬々一 御故障之御義御座候得者 十七日二而も宜御座候得とも 定而十七日二八平野江可被成</p>	<p>御座候得共益御安泰可被成 御座奉南山候、然者先日ハ 為名代参堂仕候處、段々 御腆念之御取扱被成降 忝仕合奉存候、早速御禮 可申上候處、彼是取紛罷在 其義無御座、恐縮之至奉存候 此段、御仁恕可被成下候 一過日者、右為御挨拶札場迄 御来駕、其上被為入御念候 御書表之趣、則寡君江 申聞候處、毎々御丁寧之 御取扱却而被致迷惑候 事二御座候、尚宜申上候様申付候 乍略義、此段申上候 一先日参堂之節、申上候 但馬天民方江大銃為 御一見被成御出候義、来ル十六日 昼比より御差支も無御座候者 御供仕度奉存候、萬々一 御故障之御義御座候得者 十七日二而も宜御座候得とも 定而十七日二八平野江可被成</p>	<p>御座候得共益御安泰可被成 御座奉南山候、然者先日ハ 為名代参堂仕候處、段々 御腆念之御取扱被成降 忝仕合奉存候、早速御禮 可申上候處、彼是取紛罷在 其義無御座、恐縮之至奉存候 此段、御仁恕可被成下候 一過日者、右為御挨拶札場迄 御来駕、其上被為入御念候 御書表之趣、則寡君江 申聞候處、毎々御丁寧之 御取扱却而被致迷惑候 事二御座候、尚宜申上候様申付候 乍略義、此段申上候 一先日参堂之節、申上候 但馬天民方江大銃為 御一見被成御出候義、来ル十六日 昼比より御差支も無御座候者 御供仕度奉存候、萬々一 御故障之御義御座候得者 十七日二而も宜御座候得とも 定而十七日二八平野江可被成</p>	<p>御座候得共益御安泰可被成 御座奉南山候、然者先日ハ 為名代参堂仕候處、段々 御腆念之御取扱被成降 忝仕合奉存候、早速御禮 可申上候處、彼是取紛罷在 其義無御座、恐縮之至奉存候 此段、御仁恕可被成下候 一過日者、右為御挨拶札場迄 御来駕、其上被為入御念候 御書表之趣、則寡君江 申聞候處、毎々御丁寧之 御取扱却而被致迷惑候 事二御座候、尚宜申上候様申付候 乍略義、此段申上候 一先日参堂之節、申上候 但馬天民方江大銃為 御一見被成御出候義、来ル十六日 昼比より御差支も無御座候者 御供仕度奉存候、萬々一 御故障之御義御座候得者 十七日二而も宜御座候得とも 定而十七日二八平野江可被成</p>

<p>御酒 御湯 御茶 御菓子</p> <p>右支度中御用人を以、宜御用 御坐候様被 仰出候事</p> <p>一 退引之節、都而被罷出候節之通 但送迎共若黨式人駕三人 草り取老人、雨天二候得八雨具 持老人</p> <p>一 付添致 御城入候御使者大手 外まで送出、見計引取候事</p> <p>i 君公とは豊岡藩主京極高厚、弘化四年十二月に襲封、当時、十九歳。</p> <p>ii 大坂城内への進路は、大手門から入り、二の丸を東に進み、雁木坂門を通過し、市正曲輪にある中小屋屋敷に到る。</p> <p>(以上⑦)</p>	<p>御出哉二奉存候、十八日より末八都合不宜趣、天民より申越候 又十五日より内八小生差支御座候 二付、外出仕兼候、此段御模 様承知仕度奉存候 右等之趣申上度、如斯 御座候、頓首 (嘉永五年) 正月十三日</p>
<p>i 筆者不明だが、筆跡より家老舟木老之助と推定。</p> <p>ii 城内の大名はそれぞれ城外に札場と札幌町人を置き、鑑札で出入りを管理した。</p> <p>iii 但馬天民は但馬出身の医師。当時、大坂堂島に住む。子の千里は大塩中斎門人で、彼の死後、東咳門人となる。</p> <p>iv 平野含翠堂へは弘化四年以降、毎月七、十七、二十七と出講し、出講料は年銀三百目(『平野含翠堂史料』清文堂出版、一九七三)。</p> <p>(以上⑧)</p>	<p>⑩ 京極飛騨守内猪子左家太書状 尊書拝讀仕候 如仰、不同之氣候 御座候所、益御康健 被成御勤心奉恐悦候 陳者、去十八日飛騨守 不快二付、当日之御光 来御延引被成下候様 以使者被申上、其後 之容体御尋被成下候 趣、即申聞候所、段々 御腆念之至篤忝 仕合、不快逐々快方江 被相趣候間、御掛念被成 下間敷被奉存候、此段 私より宜及御請候様被申付 如此御座候、拜手 (嘉永五年) 三月廿三日 猪子左家太 藤沢東咳先生 閣下</p>
<p>(嘉永五年) 四月十八日 舟木老之助</p> <p>二白、御内々申上候本文都合之義与申八外之事二無御座、九時比より八時比まで毎々通御講釋相願、夫より寡君御相伴二而麴酒被差上候</p>	<p>京極飛騨守内舟木老之助書状 以手紙啓上仕候、薄暑 相成候處益御萬祥被成 御座奉南山候、然者今日 御會日二御座候二付、毎々通 之刻限二御迎之者差出 可申處、都合之義も御座候間 四半時比より罷出候様可申付 依之、昼御早支度二而九時より 御来駕被降候様仕度奉存候 委細者、後刻御迎之者より 可申上候得とも、御都合も可有 御座哉二付、一応申上置候、頓首</p>

<p>尚々一同江御傳言之趣申聞候處 尚又私共より宜申上候様相頼候 頓首</p> <p>i 三月十八日の出講は藩主の体調不良で延期となったことを詫び、快方に向かっていることを伝える。 (以上⑩)</p> <p>京極飛騨守内猪子左家太書状</p> <p>尊書拝讀仕候、如仰 日々炎熱御座候所 益 御清祥被成御起居 奉恐悦候、爾者一昨日以使 者昨日之御来駕、飛騨守方江 無抛差支御座候二付御断 申上、尚又来月三四五日之中二 御光来被成下候様被申上候所 御承知被成下、先三日卜御容 可被成下哉之段、即飛騨守江 申聞候所、何之差支も無御座候 間、其日二御来臨被成下候様</p>	<p>仕度、尚又無抛支等も出来 積二御座候、尚又昼後之御心組も 可有御座歟二付、極内申上置候 以上</p> <p>i 講義は通常、正午から午後二時頃まで行われ、その後、しばしば酒宴となった。 (以上⑫)</p> <p>⑬ 「京極飛騨守内舟木老之助書状」</p> <p>一翰拜啓仕候、残暑難堪 御座候處、益御萬祥可被成 御座奉南山候、然者兼而今日 御會期之處、差懸無抛 故障之義出来仕候間、毎時 自由ケ間敷御座候得共、今日之所 御延引、乍御苦勞明朝 御来駕被成降度、呉々も 毎節御違約之段、乍不都合 何分宜御承知可被成下候、此段 御断御頼宜得鳳慮旨、飛騨守 被申付候条、如斯御座候、以上</p>	<p>申聞候所、何之差支も無御座候 間、其日二御来臨被成下候様 仕度、尚又無抛支等も出来 仕候者、其節申上候段被申聞候 右為御請以寸楮如斯 御座候、頓首 (嘉永五年) 三月廿九日 猪子左家太 東咳藤沢先生 書窓下</p> <p>再白、日々之毒熱堪兼申候折 角、御保撰奉黙祈候、當月者 月番中二付一同他出出来不申 夫故心外御無音申上候、来月者 何卒罷出度奉存候、御序も御座候者 林江も宜御致聲被成下候様、乍憚奉 希候、萬縷奉期拜謁之時候、不具</p> <p>i 三月二十八日の出講は、藩主高厚の都合で中止となり、代講が四月三日となる。 (以上⑩)</p>	<p>(嘉永五年) 六月二十四日 藤澤老先生 舟木老之助 左右 頓首 (以上⑬)</p>
---	--	--	--

以上のように、①～⑥が目録であるに対し、⑦～⑬は、講義初日である嘉永四年十一月八日から翌五年六月二十四日までの東咳の出講にかかわる諸連絡が、藩主高厚の家臣を通じて行われたことを示す書状群である。加番の交代は八朔、八月朔日に行われる決まりがあるので、その三カ月余りのちに最初の進講が行われたことが分かる。舟木ほか複数の家臣が仲立ちをしているが、中心は舟木老之助と猪子清であった（写真4）。

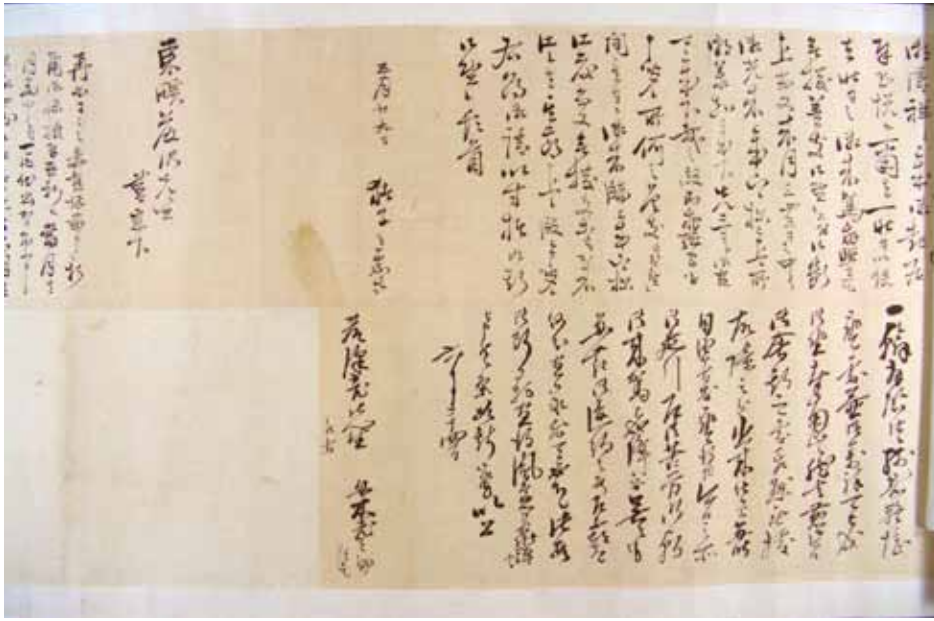


写真4（上段猪子⑪・下段舟木⑬）

視点を東咳に移してみると、それがよくわかる。八月二十七日付で御前高厚公から白銀一枚の惠投を受けたことへの礼状が残されており、東咳は「猪子君に令状を送ったが、執事からもよろしく」と記している。

また嘉永四年十二月十一日付では、但馬天民が留守中に訪ねてきたこと、西洋の火器を見せたので豊岡藩に希望者がいれば、自分が天民宅まで同道すると伝え、天民の住所を「堂島中一丁目、大丸呉服店の一筋東」と記している（ともに兵庫県公館県政資料館所蔵）。天民の名は、「尊道卷」の⑨に見え、「但馬天民方江大銃為御一見被成」という記述と「西洋火器」は連続する内容であろう。東咳の進講は、藩主高厚への「論語」の講釈という範囲を超える可能性を含んでいる。

むすびに代えて—豊岡藩から見た藤澤東咳—

これまで泊園書院と東咳にとっての豊岡藩京極家の位置付けについて論じてきたが、同時に検討すべきは、豊岡藩にとっての泊園書院の位置である。この点を知るには、泊園書院サイドでなく、豊岡藩サイドから考察を加える必要がある。幸い舟木家文書中に、豊岡藩が大坂加番を勤める前後の期間、家老である舟木家当主が記した記録がある。第五代外記直温と第六代老之助直寅である。この父子はともに筆まめで、江戸・国許を問わず、執務の記録を「御用日記」（「紳」と名付ける）、「御要用日録」、「御用控」などとして残している。弘化四（一八四七）年十一月までが外記直温で、嘉永二（一八四九）年正月からが老之助直寅によって記されているが、その間、弘化四年十二月に藩主が、八代高行から九代高厚に代わっている。そして嘉永二年八月、新藩主高厚は駿府加番を勤め、四年には、大坂加番となるのである。そこで老之助直寅によって、東咳を招聘した経緯が詳しく記される。必要な事項を抜粋し、表にして掲げた。

舟木老之助「御用日記」(嘉永4年～5年)に見る主要記事

2月9日	当秋大坂加番水野日向守と交替の奉書国許に届く
3月1日	当秋大坂加番に付き用意方引き受ける、要用はなるだけ省略、手当も規定の内二歩減少の旨、達しあり
7月8日	諸士条目読み聞かせ
7月23日	明朝大坂表へ向け、国許発足の指示
7月24日	暁八ツ時より大坂勤番の諸士、追々入来、七ツ時発足
7月27日	夜五ツ時大坂下宿へ組一同揃いの到着
7月28日	自分はじめ一同本陣へ詰め、殿を迎える用意
7月29日	暁八ツ頃、御着舟の知らせあり本陣へ詰める、七ツ時ご機嫌よく御着館、一同拝謁
8月2日	仮御城入り
8月4日	八ツ半時供揃にて本陣発駕、大手前に控え行列、六ツの太鼓で水野家人数出払い、入れ替わり入城交代
10月25日	今朝六ツ時より出宅、藤澤先生へ御招待講釈頼みの使者承知の返事あり
11月8日	藤澤先生講釈、御迎え使者勤める
12月9日	講釈首尾よく賞美を受ける
12月25日	加番中用事務向きよく賞美を受ける
正月8日	藤澤先生へ年詞使者勤める
4月18日	藤澤先生講釈
4月27日	母様と面会(28日帰国)
5月5日	知行2000石加増、御側年寄拜命
5月25日	御内用につき京都へ出向く(29日帰館)
7月17日	藤澤先生講釈
7月20日	藤澤先生に御礼挨拶
7月26日	去る秋以来出精に付き賞美を受ける
8月7日	供揃いの上、城出(江戸着館は20日)

それを見ると、加番中の十月二十五日、突如として東叅招聘の記事が見える。使者として泊園書院を訪れた舟木は、快諾を得て「新鮮鯛 一折料 金二百疋 御樽代 金五百疋」を贈り、「供廻騎馬御家老」と名を認めるが、それは「尊道巻」の①目録である。同じく嘉永五年正月八日の年始挨拶として贈られた太刀と馬は、④目録である。「尊道巻」に欠く日付が、そこには記されている。

初講のあった十一月八日、舟木は御迎御使者として駕供廻・若党を伴って泊園書院に向かうが、その様子をこう記す(□は欠損を示す)。

一 君公麻御上下御服紗、同使者之間廊下まで 御出迎、何れ麻上下 御式台御取次継上下、下座敷用人誘引、表御書院にて御対面、□□御茶煙草盆火鉢出 御退座、何れも応対

一 御居間御出座、御側用人誘引、何れも始諸士一同御次江何公、御講釈有之論語義也

一 右にて矢張御居間二而御盃事、畢於表御酒御吸物御肴□□本膳一汁三菜也、御料理御菓子等被下候、何れも取持徒士給仕、帰之節 君公始御見送如始也

こうしたことから、「藤澤先生御招手続」の筆者は舟木と断定していいだろう。講釈の記事はその後、四月・七月と出、七月二十日には泊園に出向き、縮緬などの贈答の使者を勤めるが、それは目録の⑥である。それが講義の修了であったことは、東叅が讃岐古高松の門人揚小四郎に宛てた七月晦日付の手紙でわかる。^(注10)

御城内之義、当月十八日満講之後、御艘杯殊之外御丁寧、二十日大夫舟木氏御名代御挨拶御坐候

これに続けて「小生之浅学不徳にて、御国之文明ヲ汚サザル様ニ相仕舞候事、大幸之至」と記し、進講が東叅にとつて、いかに大きな仕事であったか告白している。

こうした名譽を得た東叅に対し舟木は、進講の労を執ったことに対し、藩公から賞美を受け、知行高も加増地位も御側御用人から御側年寄に昇進している。京極高

厚への東咳進講は、泊園書院だけでなく、舟木個人にとっても記念すべき出来事であった。

こうした出会いの背景には何があったのか、最後にその点について検討を加える。

手掛かりとなるのは舟木家文書である。その中に舟木外記直温の事績を記した「舟木外記事績書」が残る。舟木外記は老之助直寅の実父で、天保五年（一八三四）から弘化四年（一八四五）の長きにわたり、御側中老・御側年寄・御側年寄上座を勤め、嘉永初年に老之助直寅に代わる。その事績は財政整理・人材養成・救荒・産業・海岸防備に及ぶが、「学舎ヲ経営シ師儒ヲ招聘シテ学バシメン」と八代藩主京極高行に説いて、天保六年、稽古堂を設立する。師として招いたのは、京都の儒家猪飼敬所（一七六一〜一八四五）であった。敬所は開堂式でも講話し、みづから記した「稽古堂記」が残されているという（『豊岡市史』上巻、一九八一）。

その後、伊勢藤堂藩の賓師となつて豊岡藩を離れた敬所の跡を受けたのは、紀州藩江戸藩邸の儒者遠藤白鶴で、藩主高行が、その高説を聞く機会があったことから招いたという。白鶴の作で、江戸の稽古堂に掲げられていた扁額が残る（『豊岡市史』上巻）ほか、舟木家にも扁額（木版）が残されている。年紀は天保十五年だが、末尾に「嘉永四年孟春豆齋舟木直寅誌」と署名されている。老之助直寅が藤沢東咳と出会うのは、その年嘉永四年十月である。^(注11)

二月には通常、大坂加番の決定が当該藩の江戸屋敷を通じて国許にも伝えられるが、老之助直寅その人は、嘉永二年八月から三年九月の間、藩公の駿府加番に随行して駿府にいた。そして翌四年、大坂加番となることで来坂する。そこでは江戸の遠藤白鶴に代わる儒者が大坂で求められたと思われるが、どうして藤沢東咳が浮上したのか、その事情を物語る史料は見いだせていない。今後の課題である。

嘉永四年八月、勤めを終えた高厚は、老之助らとともに江戸に参府する。その一方、東咳と老之助との文通は、継続していた。安政三年（一八五六）と推定される老之助宛ての手紙で東咳は、藩主の眼病を案じて、「大坂には目の良医はいないが、御保養専一に」と伝えている。「愚生最早六十三老衰」とこぼす東咳である。

翌四年十一月十七日、東咳は讃岐の門人揚小四郎に宛て近況を知らせるが、その中に猪子左家太（清）が登場する。「豊岡之藩士、先年御国表へ同伴仕候猪子左家太、此節弊塾へ入居申候」とあり、藩主高厚らが大坂を離れた嘉永五年八月以降も、猪子は東咳の身近におり、東咳の供をして高松へ行ったことが分かる。彼の泊園書院への入門は、同年八月五日となっているが、その後しばしば、大坂の書院に滞在したのであろう。^(注12) もちろんそれは、藩主の認めるところであった。

手紙には、老中脇坂安重が来坂中で台場を巡見しているとあり、ペリーに続くプチャーチンの来港の結果、大坂でも、海防問題が焦点となっていたのである。

当時、猪子左家太（一八三三〜一八九四、清・一新とも称す）二五歳。同六年（一八五九）には、二七歳にして学校奉行兼藩校総取締に就任する。幕末維新期の豊岡藩を担う新人材であるが、豊岡藩にはもう一人、「但馬聖人」と呼ばれた池田草庵（一八一三〜七八）が賓師としていた。^(注13)

東咳よりも二〇歳若く、舟木外記（直温）の死去（弘化五年二月）に際して祭文を詠んでいる。「十年之交不徒形迹」とあり、生前の交友を教えるが、草庵が豊岡藩学校稽古堂に招かれるのは、元治元年（一八六四）十一月十一日とはるかに後年である。但馬八鹿の宿南村の青谿書院を出た草庵は、三日稽古堂に着き、四・五・六日と三日にわたって講義し、「君公」（藩主高厚）とともに家臣一同が聴講した（講義内容は不明）。

大坂での藤沢東咳に始まった儒学者による進講が、藩主高厚の下で、さらに幕末にかけて継続されていることが分かる。豊岡藩における人材育成の大きな流れとして理解しておきたい。^(注14)

豊岡藩のような個別の大名家における「文事」を、進講する儒者の側と、聴講する大名家の側、双方から解き明かすことは容易ではない。双方の史料が揃うことが前提だからである。東咳の進講記録である「尊道巻」と、舟木や猪子と東咳の間で交わされた書簡、さらに当事者舟木老之助の日記などが揃うことで、ここまで明らかにすることができる。泊園書院と豊岡藩の事例は、きわめて意義深いと言えるのではないだろうか。

(二〇二五年一月二五日記)

【注】

(1) この研究事業については、報告書『幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内・近国藩』(二〇一九年三月)が出ている。なお二〇一〇年以降一九九一年にかけて、今井修平氏を中心とする科研グループが西播磨の小藩について継続的に調査研究を進めていたが、発想に共通のモノがあったと思われる。

(2) 『近世京都・大坂の幕府機構』(清文堂、二〇一四年)の著者菅良樹氏や、「徳川時代大坂城関係史料集」で幕末、藩主本多忠鄰が勤めた京橋定番の記録を公刊した大阪城天守閣宮本祐次氏らの業績が導きとなった。調査に際しては当時、財団理事長であった横井時成氏らの配慮を得た。

(3) 藪田「宍粟山崎藩天保六年大坂在番日誌」一〜三(兵庫県立歴史博物館『塵界』二八〜三〇、二〇一七〜一九年)。同「大坂加番と藩政―播磨宍粟山崎藩本多家の場合―」『塵界』三二、二〇二二)。

(4) 豊岡市の舟木家文書調査については、豊岡市出土文化財整理センター勤務(当時)の石原由美子氏の斡旋を得て始まった。個人宅での調査にもかかわらず、最大限

の便宜を計ったいただいた所蔵者舟木直人氏と令夫人に、改めて深甚の謝意を表したい。

(5) 「尊道巻」は、「豊岡藩教育関係資料」として収められているが、すでに学芸員(当時)松井良祐氏による紹介がある(「藤沢東咳と豊岡藩猪子清」『鴨東通信』四二、二〇〇一年)。

一方、東咳の猪子宛書状は「豊岡藩維新幕末史料」の一部として収められているが、猪子宛の複数の人士による書状や自筆日記「日慎録」を含むなど、猪子家から出たことが明らかである。企画県民部管理局文書課が所蔵する東咳の猪子宛書状二〇点余も、その一部と思われる。なお調査に際しては文書課非常勤嘱託伏谷聡氏のご協力を得た。

(6) 泊園記念会は昭和三十六年(一九六一)に設立され、翌年雑誌『泊園』が創刊され、現在も続いている(関西大学東西学術研究所に事務局を置き、現会長は吾妻重二文学部教授)。平成二十(二〇〇八)年に創立五〇周年を迎えることから、記念事業として特別展示「藤沢東咳・南岳・黄鵠・黄坡と石濱純太郎の学統」と国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」が開催された。あわせて吾妻重二編『泊園書院歴史資料集』(関西大学出版部、二〇一〇年)が出版されたが、その歴史が一望できる貴重な成果である。また同二十六年秋に大正蘭亭会百年記念事業が行われ、それにあわせて出版された藪田・陶徳民編『泊園書院と大正蘭亭会百年』(関西大学出版部、二〇一五年三月)に、小論「泊園書院と「尊道巻」―藤沢東咳とその周辺―」を発表している。当時の調査に際しては、学芸員前田徹氏のお世話になった。

(7) 『第二十二回泊園同窓会誌』に「尊道巻」の全文が翻刻されていることは吾妻氏のご教示による。

(8) 木村黙老のコメントについては、新聞『泊園』二四号(昭和十一年十一月一日)によって知ること、平成二十三年六月二十九日、神宮文庫での調査となった。

なお御城入儒者に関する記事（同一九号、同年一月一日）からも、昭和期に泊園書院の下で、東咳の足跡について調査されていたことがわかるが、それらは吾妻重二編『新聞「泊園」』関西大学出版部、二〇一七年による。

(9) 舟木家文書については、先述の『報告書』に共同研究者高久智久氏と連名で調査報告を載せている。古文書は挟箱・鎧櫃・薬箱に分かれて収蔵されており、とくに鎧櫃には御用日記が、薬箱には書簡類が収納されていた。「御用日記」と薬箱には、それぞれ目録が付けられ、高久が御用日記を通じて海岸防備について、藪田が舟木家当主と儒者の交流について、それぞれコメントしている。

(10) 『藤沢東咳書簡集』（私家版、二〇一四年）。東咳の出生地香川県東かがわ市引田の占部日出明氏ら有志が、個人蔵の書簡集二六〇点余を翻刻したもの。猪子清書簡集もこうした形で公表されることが望まれる。

(11) 京極公への進講について東咳の揚小四郎宛書状では、家老の舟木が九月頃に一度、泊園書院を訪れ、十月二十日頃に再訪した折、進講の申し出があったので、月に二度の出講を約したと記す。舟木の日記では、十月二十五日に承諾の返事があったと記され、符合する。八月に入城していることから見て、進講の計画はその後すぐに立てられたものと思われる。なおこの書状は高松市歴史館企画展『知の巨人藤澤東咳展〜没後百五十年記念〜』図録（平成二十五年）に写真とともに収録されている。

(12) 泊園書院の門人としての猪子清については、吾妻重二監修・横山俊一郎著『泊園書院の人びと その七〇二人』（清文堂、二〇二二年）にも紹介されている。

(13) 池田草庵から舟木子新に宛てた書状が、舟木家文書中に残っている（報告書参照）。なお草庵については全集のほか、木南卓一『池田草庵』（池田草庵百年祭記念事業実行委員会、一九七六年）などの先行研究がある。

(14) 幕末維新时期から明治期にかけての旧豊岡藩士の遊学については、村尾真一ら慶應義塾への遊学者を中心に論じた吉家定夫「豊岡藩と慶應義塾」と題する論考が

ある（慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』一七、二〇〇五）。本稿が第一幕とすれば、第二幕に当たる論考であるが、館蔵の猪子清関係資料も駆使した力作で、豊岡藩遊学生全体の動向が「まず郷里の青谿書院、次いで東京の慶應義塾、そして東京大学へと移った」ことが明らかにされ、同時に「一度東京で認められると郷里に戻ることはほとんどなく、また郷里豊岡の発展に貢献することまれてあった」特徴も指摘されている。